

母子ともに集中治療室へ

この命と共に

医療的ケア児と家族の歩み

「小児科の先生を呼んでく
ださい」。二〇〇二年七月八
日の早朝、湖南地域の産婦人
科医院の分娩室。双子を出産
したばかりの淀水希さん。当
時（三七）は、分娩台の近くで
看護師の叫び声を聞いた。
分娩室では、慌ただしく人
が動いていた。足元にはホワ
ンと赤い血が流れていた。

一人分の数字しか見当たらな
い。医院へ来たのは六時間ほど
前。時間がたつにつれ、陣痛
は強まるどころか弱くなって
いた。三八度近くの高熱で体



保育器で眠る翔太君。大津市瀬田月輪町の滋賀医科大学病院で（淀水希さん提供）

淀水家 ①双子の出産

がだるい。医師が心拍モニタ
ーで胎児の心音を確認する
と、双子のうち、一人の心音
が消えていたという。モニタ
ーを見ていた看護師らの表情
が一変し、緊急帝王切開にな
った。

中治療室（ICU）へ入っ
た。
生まれたわが子を抱くこと
ができず、家事もできないこ
とがつかかった。一カ月後、
主治医に呼ばれた。体の異変
は「劇症型溶血性レンサ球菌
感染症」（通称「人食いバク
テリア」）に感染していたた
めだった。妊婦は重症化しや
すく、劇症化すれば二十四時
間以内に死亡するという。助
かったのは奇跡だった。

だめだったのかも…。ポー
ドで見た一人分だけの数字
が、より不安をかき立てた。
しばらくして、看護師が子ど
もを抱っこして連れてきた。
男の子だ。産着を着せられ、
すやすや眠っている。続いて
二人目の男の子がきた。穏や
かな顔だった。子どもたちの
姿に「二人とも無事だ」とほ
っとした途端、力が抜けた。

この時から、医療的ケアが
必要な翔太君と家族の歩みが
始まった。
（この連載は浅井弘美が担当
します）
医療の発達により、かつて
は助からなかった命が救える
ようになった半面で、重度の
障害などにより、呼吸器や経
管による栄養投与などの「医
療的ケア」が必要な子ども
が、年々増えている。障害を
受け入れ、支えていく家族の
奮闘と、福祉行政などによる
支援態勢の課題を考える。

意識が朦朧とする中、大津
市の滋賀医科大学病院へ母子と
もに搬送されることになっ
た。子宮からの出血が止まら
ず、内部に大量のガゼが詰
め込まれた。ストレッチャー
に乗せられると気を失い、パ
ウンドするほどけいれんし
た。

大学病院で医師が患部を見
ると、血の海と化していた。
縫合のため、切開部分に針を
通すつにも、壊死が速く、針
が抜けてしまう。子宮は全摘
出となり、原因不明のまま集